

混ぜ物について理解する Part 2-1

I テサロニケ 5 : 23

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。

聖書的心理学と世俗の心理学の違いを理解する

混ぜ物の問題の主な出所は間違っただけの教理です。もう一度言います。間違っただけの教理が間違っただけの実践を生み出します。

ところで、“混ぜ物”は“真理と偽り”という学問上の問題であるだけでなく、その結果生じる、肉（肉的）と霊（霊的）の混ぜ物のことでもあります。例えば、ペテロは偽預言者と偽教師という言葉を入れ替えて使っていることがありますが、それは、もし教理が間違っているなら預言も間違ってしまうからです（Ⅱペテロ 2 : 1）。一例として、デイビッド・ウィルカーソンが正確な未来予言のための的確な手掛かりを持っているのは、彼の教理が正しいからであり、一方、ゲラルド・コウツやリック・ジョイナーのような人物が絶望的に間違ってしまうことが多いのは、彼らの教理が間違っているからです。

未来予言が外れるのですから、彼らはもちろん預言者ではなく、千里眼者にすぎません。

偽預言は、間違っただけの教理が間違っただけの行為を生み出すということを示す良い実例であるだけでなく、真理と偽教理の混ぜ物が、やがて、肉のかつ霊的な混ぜ物に転換するということをも示しています。

預言者エレミヤはこのことについて、偽預言者は必ずしも悪霊によって語るのではなく、自分の想像力や自分の心の幻によって語っているのだと書きました（エレミヤ 23 : 16）。聖霊が自分の霊に語っていると思い込んでいたものは、単なる自分の想像物にすぎないのです。カンザス・シティの預言者たちの偽預言が非難された時、例のごとく支持者たちは言いました。「それは混ぜただけだ。部分的に正しく、部分的に間違っていたのだ」と。事実、すべての預言者は部分的に正しく、部分的に間違っています。彼らは聖霊を持ちませんが、占いなら霊を持っています。彼らも金のために「占い」をしているのです（ミカ 3 : 11）。しかしながら、聖霊がイスラエルの預言者を通して語られた時には、誤りも千里眼も占いも、混ぜ物もありませんでした。

全てカリスマ的な賜物とか現象というものは、心理的なものを提供しているにすぎません。

私は、異言と言われるもののほとんどは、本物でも悪霊のものでもないと確信しています。ほとんどは全く心理的なものです（私は聖書の異言の賜物があると個人的に信じています）。同様に今日、ほとんどの預言と知識の言葉は、全く心理的なものです。そういう理由もあって、預言は吟味しなければならないということです（Iコリント 14：29）。自分の思いと霊を混同している人々がいます。トロント現象も同じで、ほとんどの現象は、悪霊の欺きと結びついた催眠誘導にすぎません。いわゆる“解放のミニストリー”の圧倒的多数についても、もちろん同じことが当てはまります。それは全く心理的なものであり、救われたクリスチャンから悪霊を追い出すというのは、聖書的に全く例のないことです。解放される時の現象とトロント現象は似ていて、だいたい同じ根源から出ています。それは人間の魂です。それはサタンが人々を欺くために使う催眠誘導なのです。

クリスチャンにも、ペンサコーラ型の欺きに引っかかり易いタイプの性格があり、肉的な性格があります。同様に、解放に引き込まれやすい性格があり、引き込まれやすいクリスチャンがいるのです。人々は倒れるために何度も列に並び、“再タッチ”を受けるためにペンサコーラに飛んで行きます。また同じ人々が繰り返し“解放”されに行くのを見ます。けれども、どちらの場合でも、彼らの生活はいつも同じで変わらないのです。絶えず“解放”を受けているクリスチャンについてざっと調査してみても、どれだけ多くの人々が慢性的な情緒不安に苦しんでいるか証明されますが、霊と魂を混同しているために、情緒的不安は霊的不安定と言い換えられています。彼らが“解放”を手に入れるどころか、いかにサタンが“解放”を利用して、可哀そうな魂を縛り付けているかがわかるでしょう。実際そのような人々はたいてい誠実で、新しい被造物としての聖さと自由を心から求めており、それを解放に期待しているのです。——彼らの行動に霊的なものがないとか、全部が心理的なことであると言うつもりはありません。むしろ単に“混ぜ物”があるということなのです。

この種の混ぜ物は、霊的なものと心理的なものを簡単に混同させることになります。神の御言葉が“魂”について語る時、私たちが霊的・肉体的存在であると同時に、心理的存在であることをも認めています。

イエス様の精神的・感情的苦痛は“魂の苦悩”と呼ばれています。Iテサロニケでパウロは続けて、自分が体験するように定められていた多くの苦難に遭ったことを記録しています（Iテサロニケ 3：4）。また、自分のミニストリーチームが大いに落胆したこと（Iテサロニケ 3：1）、出来事に対し個人的にがまんができなかったこと（Iテサロニケ 3：5）を正直に語りました。その中で、サタンが彼の計画を1度ならず妨げたと引き合いに出しているところが少なからずあります（Iテサロニケ 2：18）。このような事例が聖霊によって聖書正典に書かれ、感情的トラウマとサタンの圧迫についての霊的な視点が提示されています。

しかしながら今日では、世俗の心理学というバベルが現代の教会現場を大いに支配してい

るため、パウロは「信仰が欠けている」「否定的である」「ビジョンを持っていない（信仰のことばと繁栄神学の行商人の一人が、すでにそう非難した）」などに見なされてしまうでしょう。これはまた、ベニー・ヒンがヨブの苦しみについて異端的な攻撃をしたことを思わせませす。

現実的に、見えるところによらず信仰によって歩むとは、不利な環境が存在しないかのように振る舞うこととは無関係です（“信仰の言葉神学”の嘘は、「病気の症状が現れたなら、身体が嘘をついているのだ」と言います）。信仰によって歩むとは、むしろ、状況に関わりなく主を信頼することに関係しています。勝利するクリスチャンの歩みとは、苦しめられないということではなく、私たちを苦しめる試練の中で主が支えて下さると信頼することであり（Ⅱコリント4：8～18）、勇気を失わないことです。また、勝利の中を信仰によって歩むとは、勝利を告白し、妨害させないようにサタンを縛り付けることでもありません。そのようなナンセンスは、“[つなぐこと、解くこと](#)”が文脈上で聖書的に意味していることとは、全くもって何の関係もありません。まして「御国の支配を確立することを諸々の天に宣言する」という馬鹿げたガラクタを意味しているわけでも全くありません。そんなことをしているエキュメニカルなマーチ・フォー・ジーザスは愚かです。“縛ること、解くこと”が意味しているのは、主が私たちの回りに垣根をめぐらし、サタンが私たちに対し、しても良いこと、してはいけないことの制限を設ける（サタンは神様が赦された時だけ私たちを殺すことができる）ということです。主がサタンに勝利を許す時には、それは神様に策略があつて、神様の目的のために私たちを背を向けておられるのです。ローマ人への手紙8章にあるように、「すべてのことがともに働いて益となる」のであつて、すべてのことが益になるわけではありません。私達にはサタンが敗北するという約束が与えられていますが、それはあらゆる戦いにおいてということではありません。神様がサタンに勝利を許される時、（イエス様の十字架やステパノの殉教のように）ただサタンにとって逆効果を与えるためなのです。

これらことに加えて私たちには、主が私たちを支えておられること、そして神の恵みによって支えることのできないような困難に合わせられることはない保証されています。

それにもかかわらず、世の心理学のためにこの聖書的真理が歪められ、無視され、あるいは異教的に拒絶されています。神の御言葉の本当の意味に基づくのではなく、肯定思考や動機づけ心理学に基づいて、ただ“勝利を告白”し“敵を縛る”ように教えられているのです。

もし世俗社会で開かれている、販売管理職のためのやる気の出るセールス・セミナーに行くなら、見目麗しい、動機付け上手な講師が、カリスマ性に輝きながら壇上を飛び跳ね、マイクでこのように言うでしょう。「3つのステップがあります。」「ステップ1、あなたのビジョンを確認しなさい。」「ステップ2、不利な状況や警告は忘れなさい。否定的な考えをいっさい受け入れてはいけません。ただあなたの目的とビジョンに焦点を合わせなさい

い。」「ステップ3、ビジョンを確認し、肯定思考を最大にし、否定思考を忘れたなら、あなたのビジョンに誰かが投資してくれるようになっているでしょう。」

このようなこの世の心理学が聖書的理論になりすまして、教会に入り込んでいるのです。詐欺師の説教者が日曜日に立ち上がって自分の“ビジョン”を分かち合い、疑問を抱く人には「イエスの御名により否定的な思いを拒絶する」、「神様はこれが君のビジョンになることを願っておられる。君もそれに加わるべきだ」と言うでしょう。

私は数えきれないほど多くの教会が、霊的には見えるが実は愚かなこんな行動をとって、経済困難に陥り、教会員を失うのを見てきました。イギリス北西部に住むある人は、キングダム・ナウとトロントに狂い、反イスラエルの再建主義説教者リック・ゴッドウィンの影響を受け、神から命じられたのではない巨大な会堂を文字通り再建するために、巨大な借金をして群れのほとんどを失い、収支を合わせるためにパートタイムで保険を売り始め、ついに国を離れてしまいました。少し離れた所にある同じ教団の別のペンテコステ教会は、退職したクリスチャンのための郊外住宅計画に乗り出し、財政スキャンダルを起こしました。

当然のこと、彼がでっち上げた建築計画や他のどんな計画も、神のビジョンではなく自分の計画であったと判明し、物事はうまく運ばなくなり、その後は「信仰に立ってサタンに対抗する」事態に陥ってしまいました。

会衆が経済的搾取にうんざりして教会を離れ始めると、厳しい羊飼い（過酷な牧会）に豹変し、それらの人々は“反抗的な霊を持っている”と言われるようになりました。

このような混乱はすべて、世俗的な心理学と世の無益な哲学が、聖書的心理学とキリスト教教理とに混入した「混ぜ物」から生じます。この同じ混ぜ物のために、トロントの説教者フィル・プリングルのシドニー・シティー・チャーチのように、非常に多くのクリスチャンがアムウェイやマルチ商法のようなものに関わるのを見ることとなります。心理学的にクリスチャンがそういうものに引っかかりやすいのは、そのようなたくらみが、聖書的原則に偽装した心理学的バベルに基づいているからです。12ステップ・プログラムを受けている人々の中には、アルコール依存症患者の匿名グループで断酒し、救われた元アルコール依存者がいる一方で、自分にキリストが必要であると信じないで地獄に向かっている多くの人があります。後者のような組織では、人々をイエスの十字架に導く代わりに、聖書的原則と世俗の心理学との混ぜ物によって、万民救済してくれる主観的な“私の理解する”全能の神へと導いているのです。

この混ぜ物の神学的起源は、もちろんグノーシス主義です。そこでは、文脈を無視した主観的・神秘主義的な聖書観が、客観的・解釈学的聖書観に置き換わっています。グノーシス

派はいつも聖書の専門用語を使いますが、定義が異なっています。ローマ・カトリックのグノーシス主義はセンサス・プレニオールと呼ばれます。ローマの教会は、古典的プロテスタントが救いは恵みによると信じていることに、すぐ賛同するでしょう。けれども、恵みによるという表現で彼らが表しているのは、“神の契約による恵み”を意味するヘブライ語のヘセッドや、“賜物”を意味するギリシャ語のカリスマや、“不相応な恩寵”を表す英語の定義ではありません。ローマ・カトリックが実際意味している神聖な恵みとは、哀れみによる不相応の賜物のことではありません。霊的に腐敗した偽宗教システムの異教的秘跡によって獲得される、人の知恵では測り知れない不可思議な実態なのです。にもかかわらず、言葉としては“恵み”を信じているのです。

ニューエイジャーも“光を見ること”を信じているグノーシス派です。彼らが意味しているのは、内なる自己の宇宙的照明を理解しているということです。多くはヒンズー教のコピーで、彼らも“生まれ変わること”を信じていますが、それは輪廻転生という意味です。スーフィーのイスラム教、ハシッド派のユダヤ教、モルモン教はすべて、聖書の用語を異なる意味で使う偽りの信仰体系です。これらはすべてグノーシス迷路の一部です。彼らに証をする時には、同じ用語を使っているから彼らも私たちと同じ理解を持っていると思い込まないで、いつも注意深く、聖書的に用語を定義する必要があります。

同様の問題は、ヴィンヤードや再建主義のようなカリスマ運動のグノーシス的表現にも見ることができます。聖書的用語を使っていますが、聖書とは全く異なる意味を持っていることがよくあり、特に“王国”“宣言”“使徒”“つなぐこと、解くこと”“預言的ミニストリー”という言葉が異なる意味で使われています。

プロミス・キーパーズ運動はヴィンヤードから始まり、男性クリスチャンの弟子化ガイドとしてロバート・ヒックの「男の旅路」という本のコピーが数万部も配布されました。その本には、「イエス・キリストは他の男性とのセックスに誘惑された」「ティーンエイジャーが結婚前に性体験したり、麻薬を初体験したりすることは通過儀礼と見るべきであり、それを通して男となることは祝福されるべきである。なぜなら私たちは罪体験を祝う方法を見つける必要があるからだ。」と書かれています。しかし、この本がニューエイジ的に男の象徴を強調しているために、そのような冒瀆的で不道德的な忌むべき内容が薄められてしまっています。このような曲解の全体が、グノーシスが促進する世的心理学と聖書的心理学の混ぜ物、聖書とニューエイジ思想の混ぜ物から発生しているのです。最も深刻な問題は、グノーシス症候群が、信仰と繁栄の神学/信仰の言葉神学の大陣営の本質となっていることです。

「あなたの販売目標を可能にする」は、「あなたのビジョンを実現する」になります。「考えを大きくする」は「あなたの天幕を広げる」に、「否定的なものを無視する」は「見るところによらず信仰によって歩む」に、「肯定的に考える」は「信仰の告白」や「イエ

スの名前で否定的なものを叱りつける」になります。嘆かわしいことに、教養のある聖職者たちは、神学校で聖書の教理の代わりに、ますますこのようなことを教えられています。そして無学な聖職者たち（特に、あまりにも多くのペンテコステ派では、もはや聖書的な基準が残されていないことが多い）、訓練されていない聖職者たちは、聖書的にあまりにも無学で知性が欠落していて、混ぜ物を判別する能力を持つことさえできないのです。

いつも言うように、間違っただけの教理が間違っただけの行為を引き起こします。ニュージーランドのオークランドにあるエリム・インターナショナル・スクール・オブ・ミニストリーの2人の講師が、私たちに苦情を書いて来ました。自分たちは、ミニストリーのために訓練されている人々に、悔い改めを教えることはしないように指示されている、エリムは恵みの方を信じているのであり、悔い改めは否定的なメッセージであるからと。この講師たちはそうすることで、ニュージーランドのエリムの指導的説教者、窮状にあったイアン・ビルビーを支持することができるかと当然のように感じていました。イアンは、ベニー・ヒンを制裁し、またトロントの、神は動いておられるという主張をプロモートしていた間、ずっと不倫関係が続けており、このことが暴露されたのです。4月の定められた日の大地震に備えるようにというジェラルド・コーツの偽預言を国家的に伝播させた、あのイアン・ビルビーのことです。偽預言は、トロントの場合のように魂から来るものであり、霊からのものではありません。ビルビーに罪の道を備えたのは、“否定的／肯定的”な世俗の心理学でした。

この誘惑がどこから発生したかについては、十分に報告されています。ロサンゼルス近郊のクリスタル・カテドラルのロバート・シューラーは、ニューヨーク市にあるマーブル大学教会の故ノーマン・ヴィンセント・ピール博士の弟子で、「肯定思考の力」について教え、本を著した、フリーメイソン33階級の人物です。シューラーは、世俗の心理学を福音派集団に導入する、サタンの中心的な道具となりました。そして、A・A・アレン、E・W・ケニヨン、アグネス・サンフォード、ウィリアム・ブランナムらに影響された信仰と繁栄神学の詐欺師たちが、肯定思考の力を採用したのです。

金儲け主義の説教者たちは、「主が私に示された」と言ってグノーシス（特別な神秘的啓示）を主張します。けれども、彼らがやっていることは全部、彼らの父である悪魔のパラソクソウジン（真理を偽りの隣に置くこと）であるという事実には全く言及していません。

同じ使徒書簡で、聖霊はパウロを通して、この種の問題に対する解決策は、預言を軽視することでも聖霊を押さえつけることでもない（**Iテサロニケ5：19～22**）と教えています。私たちは真理によって誤りを正すのであり、終焉説（聖霊の賜物が現れたのは初代の使徒たちだけで、その後、永遠に止まったという偽りの考え）のような別の誤りで正すではありません。私たちはむしろ、悪を避け、神からのものであるかどうかを試すことが命じられています。

それなら、私たちは聖書的心理学と世俗の心理学の違いを理解する必要があります。次の節（**I テサロニケ 5：23**）で、聖霊がパウロに靈感を与え、私たちに説明させています。パウロは私たちの“からだ（ソーマ）”“たましい（プシュケ）”“霊（プニューマ）”の聖めのために祈っています。ヘブライ語ではその3つは順にグフ、ネフィシュ、ルアツハと言います。3つのものはそれぞれ区別されます。私たちは3次元の存在です——3者でできている存在です。私たちは三位一体の神の似姿に造られたイマジオ・デイという作品です。身体が魂と区別されるように、魂は霊とは区別されません。

けれども、世の心理学や東洋宗教の神秘主義（ニューエイジはこれを模倣している）によると、私たちは2次元だけの存在です。魂と霊の機能は入り組んでおり、2つが混じり合って一つの実態のように見えるからです。感情、知性、意志などは、神様と共感する霊の機能と混じり合っています。

神様とのコミュニケーションにおいて、良くては理性が混乱し、最悪は感覚が混乱することがあります。このことが起こると、私たちの魂は霊に仕える代わりに、肉に仕えてしまいます。このため、超ペンテコステ派や過激なカリスマ派に、あのように多くの肉欲を見ることになるのです。ひとたび体験主義神学が神の御言葉の立場を乗っ取ってしまうと、聖書的に見分けることは、パリサイ的であるとか聖霊を悲しませているとか言われるようになり、深刻な状態に陥ってしまいます。なぜなら肉体的なものとうそでないものを見分ける手段は神の御言葉（**ヘブル 4：12**）だからです。そういうわけで、何年間かトロントやペンサコーラなどに深入りしてしまった教会やムーブメントには、将来も希望もありません。人生に将来を得て主をお喜ばせする唯一の方法は、そのような場所を離れることです。

聖書的心理学の最高のハンドブックは箴言です。箴言は世俗心理学のどんな本より、人間の行為と動機について多くを教えてください。東洋神秘主義のような世俗の心理学は、誤って3次元の存在を2次元の存在に降格するので、その結果、最も深い内なる人、つまり私たちの霊を正しく識別することができず、認識することさえできません。世俗の心理学も東洋宗教も、人間の霊をきわめて抽象的なものと見ており、聖書的視点で捉えてはいないのです。

たとえば、異常行動が器質的原因に由来する時（化学物質の不均衡、トラウマに関係するもの、投薬の副作用、神経的なもの、ホルモン性のものなど）、精神科の薬はある程度人の助けになります。生物医学的な視点から生理学的な病気として精神疾患を捉えているからです。もし誰かの症状に器質的な原因があるなら、生理学的な問題の化学的な原因を治療することで、結果的に破壊的な行動症状を緩和することができます。

しかし、ひとたび私たちが臨床心理学の分野に進むと、感情体験から来る不安を取り扱う

ことになるのですが、ほとんどの世の専門分野ができることは、その影響を取り扱うことだけで、決して内なる原因を取り扱うことはできません。このためには、霊の再生（イエス様を信じる信仰を通しての新生）が必要なのです。人の積み重なった問題の根底にある原因は罪で、私たちは皆、罪を持っています。しかし、世の心理学は普通、聖書的な意味での罪の存在を認識していませんし、もし認識していても、取り扱うことはできないでしょう。症状が病気として治療されないことも多く、世の心理学では悪くなるだけのことも少なくありません。人間を2次元の存在と見る前提には、根本的に不備があるのです。治療のための心理学は、基本的に、その人の外から内面の変化を見ることで問題を取り扱おうとします。一方、聖書的心理学は、まず人が罪を悔い改めてイエス様の贖いとイエス様が霊的な導き手であることを受け入れ、他人を快く赦す必要があると教えています。そうするなら、救いの結果として、内側から外側へと変化が起こると教えています（ローマ12：2）。

私達は新しい霊的被造物となりましたが、心理的に新しい被造物になるということは、自我に仕えていた古い肉と共に日々死んで、新しくされた魂に仕える霊と共に日々復活するというプロセスのことです。これは一度で完成するのではなく、更新されるプロセスです。心理的な更新は霊的な更新を反映しています（エペソ4：23）。このため、クリスチャンとして約束された“健全な心”について説明する時、パウロはプシュケという単語を使わず、“行動を制御する”という意味のソフロニスモンという単語を使いました。これは自制（エクレイテイ）という御霊の実を直接反映するものです。心理的な自制は、霊的変化が起こることで生じ、霊的変化を反映しています。この変化のプロセスは救いから始まりますが、イエス様の再臨で完成に達します（ピリピ1：6）。

聖書的心理学によると、人の異常行動は、イエス様との個人的出会いの後に霊的変化が起こった結果として、正しい行動に変わります（ヨハネ5：15）。私たち全員の自我が破壊的に機能不全だったわけではないかもしれませんが、生まれ変わっていない人は皆、墮落のために異常なのです。言い換えると、一般的に、精神異常は程度の問題にすぎません。イエス様を信じていない人は皆、意志が罪の力に縛られ、魂（心、感情など）が肉に仕えており（テトス1：15）、定義によればどこか狂っているのです。本当の意味で健全な心の力を見いだすのは、キリストにある時だけです。その時プロセスが始まり、私たちは変えられ、キリストの心が与えられるのです（Iコリント2：16）。救われていない人の魂が霊に服従する可能性が唯一あるとすれば、その人が悪霊に付かれ、霊がサタンにコントロールされるという場合だけです。聖書的心理学は、人間の魂についての誤った理解、霊と魂との関係を2次元的に理解する世俗の見方とは正反対のものです。

しかし、世俗の心理学は臨床的なものだけではありません。どうやって人を操作して購買意欲を起こさせるかを広告会社にアドバイスする消費者心理学者から、兵士が殺人命令を盲目的に受け入れ、何も考えずに殺人を犯すように訓練する“身体記憶”の条件反射的心理戦

争の専門家、また、メディア関係の専門家にスピン・ドクトリンについてアドバイスする政治心理学者に至るまで、現代の西洋社会は高度に心理分析されており、それは教会にも当てはまります。

当初、教会への心理学の侵入は、何か明白な価値を持つ無害なものとして始まりました。C・S・ロベットのよう作家が、サタンが私達を誘惑する方法について聖書が述べている事柄と、人間行動心理の様々な要素との間に類似点を見いだそうとした時、ある危険な兆候が現れました。それからビル・ゴザードが、聖書の物語を正しい行動の模範としてではなく、正しい行動とは何かを確立するための教理的公式として使い始めました。彼のセミナーは、しっかりとした聖書の根拠に基づいてまとめられたものではない心理的要因に重点を置いていたため、若者に誤解を与え、権威に対する偏った見方へと誘導し、また、潜在的に危険な影響を及ぼす可能性のある偏った結婚嫌悪感へと誘導しました。たとえば、結婚は30歳まで遅らせるのが一番良いという彼の考えに聖書の根拠はなく、婦人科医学においては、30歳は初めての妊娠において、妊娠合併症、不妊症、先天的欠陥、出産合併症のリスクが統計的に増加し始める年齢であるという臨床的所見と深刻に対立します。彼の論議はしっかりした聖書の釈義に基づくのではなく、青年心理学と聖書を混ぜた彼の見解に基づいたものです。彼のミニストリーは、彼の兄弟とスタッフのセックス・スキャンダルで組織が揺さぶられた後、独身主義を他人に押し付けようとして非難され、さらに批判を浴びることになりました。

最近になって、アメリカではジェイムズ・ドブソンによって教会が心理分析されてきました。ドブソンはエキュメニカルとプロミス・キーパーズの推奨者です。ドブソンのセミナーの影響で、多くの問題が生じることになりました。初期の頃から、ドブソンの講義には“黄色信号症候群”が現れていました。彼はクリスチャンの親たちに、10代のマスタベーションが間違っているかどうか分からないと語りました。このため、プロミス・キーパーズは再び、10代の婚前交渉は“通過儀礼”として祝われるべきだというヒッキーの見解を後押しすることになったのです。

フラー神学校の宣教学部は、前評判の悪いエキュメニカル派のモーリス・セルロの支持者であり、ジョン・ウインバーの同僚でもあるピーター・ワーグナーに引き継がれていました。一方、心理学の大学院では、聖書心理学と非聖書心理学の混ぜ物心理学を盛んに広めていました。ワーグナーがセルロを支持していたのは偶然ではありません。世俗の心理学は、信仰の言葉神学と繁栄誇大広告神学とは同じ穴の貉なのです。ここから物事はますます悪くなり、さらに悪いものへと行って行きました。ここで、ドブソンやゴザードが真実なことは何も言わないし書かない、あるいは、聖書的なことは何も言わないし書かないと言っているわけではありません。彼らもそのことはしているのです。しかしここにも“混ぜ物”があると言っているのであり、その混ぜ物とはアカタルシスなのです。